

事例

1

時間と共に 進化する連携

●連携の発端

地理的に隔絶された高校が 危機感を共有

「嶺南」と呼ばれる福井県・若狭湾沿岸地域では、十数年前から普通科を設置する高校5校が、生徒の学力と教師の指導力の向上を目指し、多様な連携事業を展開している。

発足当初は、進路指導に関する有志の自主研修会が中心であった。日々の学習指導や推薦入試対策など、その年の幹事校がテーマを設定し、情報交換が行われていた。この

福井県・嶺南地域の高校間連携

各校が

自校の強みを生かして 連携事業全体に貢献

福井県の嶺南地域では、「地域の子どもを地域で育てる」ために5校で連携事業を行っている。自校の強みを生かしながら他校と共に高まることを目指す連携の形成過程を取り上げる。

頃から取り組みに参加している若狭高校の中村秀明先生は「連携は、他地域から地理的に隔絶された嶺南地域内での、教師の交流を目的にスタートした」と振り返る。

「当時は、近隣の高校同士でも情報交換する機会はあまりなく、お互いがどんな指導をしているのかを知ることがありませんでした。また、校内で目の前の生徒の力を伸ばし切れていないという思いは、多くの教師が持っていたと思います。地域の子どもたちを地域でしっかりと育てるためにも、高校が連携して嶺南地

域全体の教育力を高める必要があるという声が上がってきました」

研修会の成果は、徐々に目に見える形で表れた。

「当時の嶺南地域の高校は、福井市内の高校に比べると大学入試に関する情報が集まりにくいいため、生徒や保護者、そして教師も大学進学に対する意識が希薄で、国公立大への合格実績も伸び悩んでいました。しかし研修会で、他校の教師から情報や経験談を聞き、自分になかった視点や指導ノウハウに触れたことで、『もつと出来るはずだ』という気持

福井県立若狭東高校

◎1920(大正9)年に遠敷郡立遠敷農林学校として開校。「進取・敬愛・誠実」を校訓に、豊かな人間性を涵養する教育を目指す。大学などへの進学率は4割、6割は地元企業を中心に就職する。近隣の学校と比較して、卒業生の地元就職数が多いのが特徴。

設立 1920(大正9)年

形態 全日制／普通科／産業技術科／生活科学科／電子機械科／電気科／共学

生徒数(1学年) 約190人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、都留文科大、福井県立大に3人が合格。私立大は、早稲田大、愛知学院大、金沢工業大、大阪学院大、大阪産業大、関西大、摂南大などに延べ29人が合格

住所 〒917-0293 福井県小浜市金屋 48-2

電話 0770-56-0400

Web Site <http://www.wakasahigashi-h.ed.jp/>

福井県立若狭高校

◎1897(明治30)年、小浜尋常中学校として開校。「異質のものに対する理解と寛容」を教育理念に、独自の教育を展開し、リーダーとして地域や社会に貢献できる生徒の育成をめざす。生徒の90%が進学する。2011年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定。

設立 1897(明治30)年

形態 全日制・定時制／普通科／理数科／商業科／情報処理科／共学

生徒数(1学年) 約300人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大、京都大、名古屋大、金沢大、福井大、滋賀大などに118人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、関西大、近畿大、立命館大、龍谷大などに延べ337人が合格。

住所 〒917-8507 福井県小浜市千種 1-6-13

電話 0770-52-0007

Web Site <http://www.wakasa-h.ed.jp/>

ちが個々の教師に芽生えました。連携の中で得た情報も活用しながらそれぞれの高校で進路指導などを改善していったところ、各校で合格者数が増えつつあります」（中村先生）

以来、連携事業は予備校講師を招いた難関大入試への対策講座、更にセンター試験対策講座と生徒対象の取り組みも立ち上げながら拡充された。だが、そうした内容に物足りなさを感じる教師もいた。2006年度から若狭東高校に勤務する中森一郎先生もその一人だった。

「私が異動した年に、若狭東高校は連携事業の幹事校になりました。生徒の半数以上が就職する本校が、



福井県立若狭東高校
中森 一郎 Nakamori Ichiro
教職歴26年。同校赴任歴6年目。進学指導室長。国語科。



福井県立若狭高校
中村 秀明 Nakamura Hideaki
教職歴25年。同校赴任歴4年目。進路指導部長。数学科。

国公立大志望者が多い高校と連携する意義は何だろうかと考えました」
確かに、同校にもセンター試験対策講座などに参加する生徒は、少数ながらもいる。参加した者は、同じ地域に住む他校の生徒が高い目標を掲げて学習に打ち込む様子を目にし、全国規模の大学入試の厳しさに気が付き、刺激を受けてくるという。

「しかし、大学進学を目指すような生徒だけでなく、本校の多くの生徒のように卒業後、就職して嶺南地域で生活を続けていく子どもたちの基礎学力を高め、進路意識を刺激する連携も行わなければ、地域の教育力の底上げにはつながらないのではないかと考えたのです。また、進学校のノウハウを取り入れるだけでなく、本校独自の強みを生かしながら連携事業全体に貢献したいという思いもありました」（中森先生）
そこで、それまでの上位層の生徒をターゲットにした取り組みに加え、地域の中下位層にスポットを当てようという連携も行われるようになっていった。

●連携の深化
自校の強みを生かした
地域貢献を模索する

嶺南5校の連携に大きな変化があったのは3年前だ。連携事業の一つに、福井県で一斉に行われる小論文講座が組み込まれていた。もともとは県の学力向上事業の一環として行われていたもので、講師への謝礼や教材費は県が負担していた。ところが09年度からは県の予算も縮小され、地域ごとの開催となった。これまで通りの開催が難しくなっ

まったことで、若狭東高校が中心となって、小論文講座の立て直しを図っていくことになった。

「従来は、一人の講師が生徒全員に対して学部系統ごとの出題傾向などを説明する形態でした。しかし、学校や生徒の状況を踏まえていない一般論を聞く場となっていたので、もつと生徒一人ひとりが満足する方法があるのではないかと思っていました。日ごろから生徒と担任の交換ノートや週末課題を通して学校全体で『書かせる指導』に取り組んでいた本校なら、何か貢献が出来るので

嶺南地域の高校間連携

□概要

当初、有志の教師の自発的な集まりからスタートした嶺南地域の高校間連携だが、現在は福井県の「高校生『総合的な学力』向上推進支援事業」の一環として、県のサポートを受けるまでに発展した。だが、運営主体はあくまで嶺南地域の教師であり、その時々々の生徒の実態を捉えながら、取り組みの内容は毎年見直されている。例えば、昨年まで行われていた「センター試験対策講座」は各校単体でも対応できる内容であると判断し、今年度からは内容が刷新されている。

□連携校

私立・敦賀気比高校 敦賀高校 美方高校 若狭高校 若狭東高校

□取り組み例（抜粋）

- 1 小論文対策講座
小論文の基礎基本を講義とグループワークを通して学ぶ。8月に実施。
- 2 センター試験対策講座
国数英の3教科について苦手科目克服を主眼に、2泊3日の学習合宿を行う。8月に実施。
- 3 難関大個別学力試験対策講座
外部講師による英語、数学（文理別）、現代文の講義を聴く。7月に実施。
- 4 難関大個別学力試験指導法講座
外部講師を招いて、英語、数学（理系）、現代文の指導法を教師が学ぶ。10月に実施。

はないかと考えたのです。そこで本校の教師が講師を務め、新たな小論文講座を行うことにしたのです」(中森先生)

09年8月の小論文講座に向けて、若狭東高校は5月には教師12人の指導チームを発足。人文・教育、医療・保健など5分野を1〜3人の教師が担当し、教材研究を開始した。

自校の生徒だけでなく、地域の進学校の生徒を指導することになり、若狭東高校の指導チームは、何度も自主教材を修正し、模擬授業を行い、入念に準備をした。

「一般的にほとんどの教師は、小論文指導を専門的に学んできたわけではありません。ノウハウの共有を積み重ねて、指導力を高めています。講座の準備や実際に他校の生徒を教える経験を通して体系立てて小論文の指導力を向上できるのでないかと期待しました」(中森先生)

若狭東高校で開催した新しい小論文講座には、若狭東高校を含めて4校から、計157人の生徒が参加した。60分間で小論文を書き、90分間の講義を聴いた上で、60分間でリライトを行って、それを生徒が相互評

価するという流れだ。

新しい小論文講座は生徒、教師双方に大きなインパクトを与えた。若狭東高校の生徒は日々の取り組みが結実し、進学校の生徒と同等以上の文章を書けたことに自信を深めた。一方、進学校の生徒は考える力、文章を書く力を持つ他校の生徒の存在に驚き、小論文への興味を深めた。

「メリットは本校の教師にもありました。他校の生徒に対して授業をするという緊張感が良い刺激となり、他校との連携の取り組みを通して私たち自身の指導スキルも高まったと思います」(中森先生)

新しい小論文講座を見学した中村先生は、5分野全ての講座が同じ流れで進行している様子を見て「若狭東高校内できつと入念に準備をしたのだろう」と感動したという。

「初年度の本校からの参加者は推薦入試志望者が中心でした。しかし、講座を体験した生徒から評判を聞き、翌年は一般入試を目指す生徒も多く受講するようになりました。他校の生徒と小論文のテーマについて議論を深める経験が、思考力や表現力を鍛える上で役に立つと分かっ

たのでしよう」(中村先生)

●連携のこれから 緊密な連携を結び 地域の教育力を高める

若狭東高校が「自校の強みを生かした地域貢献」を追求したことが、連携事業の中で小論文講座の発展につながった。中森先生の「一般入試対策を本校が主催してもあまり意味がない。責任を持って出来ることは、当時は小論文しかなかった」という言葉はその裏付けともいえる。

更なる進化を遂げるべく、小論文講座は今年度から若狭高校と若狭東高校の教師がペアを組んで進めるように改められた。各校の教師の指導力を向上させて地域の教育力を高めたいとの考えだ。

「小論文講座での学びはあくまできっかけです。日々の指導があつてこそ、連携事業の講座が生きてきます。だから、複数の高校の教師が講師を務め、ノウハウを各校に持ち帰り、地域全体で教師のスキルアップを図りたいと考えました。生徒が相互評価をするなどのグループワークに取り組む意義などを他校の先生に

知ってもらいたいという気持ちもありました」(中森先生)

高校間連携での小論文講座は、各校の小論文指導において一里塚として機能しているという。

「小論文講座の事前、事後指導を検討し、体系的になるように自校の小論文指導を再構築しています。今後は、更に多くの教師に講座を体験してもらい、『他校の取り組みから多くを学べる』ことを実感してほしいと考えています」(中村先生)

十数年続けてきた連携の最大の成果として、中村先生も中森先生も「校内外で教師の意思疎通がスムーズになったこと」を挙げる。

「3年間で卒業する生徒とは異なり、教師はもう少し長い期間地域に残ります。連携を一層強め指導力を高めねば、地域が発展しないと、今では多くの教師が自覚しつつあると思います」(中森先生)

「そうした自覚が全教師共通のものとなれば、どの高校に進んだ生徒であっても、地域が責任を持って伸ばすことが出来る。これは理想ではなく、十分に実現可能なことだと私は思っています」(中村先生)